

第4講 物語(2)

例題

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

御女、村上むらむらの御時の宣耀殿せんえうでんの女御、かたちをかしげにうつくしうおはしけり。内へまゐり給ふとて、御車くるまにたてまつりたまひければ、わが御身みみはのり給ひけれど、御ぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける。ひとすぢをみちのくにごみにおきたるに、いかにもすきみえずとぞ、申しつたへためる。御めのしりすこしさ⑥がり給へるが、いとどらうたくおはするを、みかど⑧いとかしこく時めかさせ給ひて、かくおほせられけるとか、

いきてのよしにてのちのちのよもはねをかはせるとりとなりなむ

御かへし、女御、

あきになることのはだにもかはらずはわれもかはせるえだとなりなむ

古今うかべ給へり⑨ときかせ給ひて、みかど、こころみに本をかくして、女御にはみせさせ給はで、「やまと歌は」とあるをはじめにて、まづの句のことばをおほせられつつ、とはせ給ひけるに、いひたがへ給ふこと⑩、詞にても歌にてもなかりけり。かかることなむと、父おとどはきき給ひて、御装束して、手洗ひなどして、所々に誦経ずきやうなどし、念じいりてぞおはしける。

問一 傍線部①～⑫について、(1)文法的説明、(2)敬意の対象としてそれぞれ最も適切なものを一つずつ選び、

記号で答えよ。ただし、同じものを何度用いてもよい。

- (1) ア 尊敬の動詞 イ 謙譲の動詞 ウ 丁寧の動詞
 エ 尊敬の補助動詞 オ 謙譲の補助動詞 カ 丁寧の補助動詞

ア	父おとど	イ	みかど	ウ	宣耀殿の女御	エ	その他
⑦	①	⑧	②	⑨	③	⑩	④
⑧	②	⑨	③	⑩	④	⑪	⑤
⑩	④	⑪	⑤	⑫	⑥		

出典

「大鏡」

平安時代後期の一一〇〇年頃の成立。ジャンルは歴史物語。作者未詳。この作品では大宅世継おおやけのよつぎと夏山繁樹なつやまのしげきと若侍の三人が、戯曲的構成で話をすすめていく。

重要古語

◇みちのくにかみ 檀紙だんし。檀まゆみの繊維で作られた和紙。北地方で多く生産された和紙。

◇かはせるえだ 二本の木の木理もくめが連なっている枝。これも「はねをかはせるとり（＝比翼の鳥）」と同じく「長恨歌」の一句を引く。

問二 「あきになる」の和歌の中にある「ことは」とは、誰の「ことは」か。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 父おとど イ みかど ウ 宣耀殿の女御 エ その他

問三 歴史物語といわれている作品として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 栄花物語 イ 源氏物語 ウ 浜松中納言物語
エ 平家物語 オ 保元物語

問四 「あきになる」の和歌において、「あき」は「秋」と「A」の掛詞となっている。「A」に相当する語を漢字一字を含んだ二字で記せ。

解法と学習の手引き

太字の部分の語句や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。

御女、村上むすめの御時の宣耀殿せんぎょうでんの女御、かたちをかしげにうつくしうおはしけり。内へまゐり給ふとて、御

車くるまにたてまつりたまひければ、わが御身みはのり給ひけれど、御みぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける。

ひとすぢをみちのくにがみにおきたるに、いかにもすきみえずとぞ、申しつたへためる。御みめのしりすこし

さがり給へるが、いとどらうたくおはするを、みかどみかどいとかしこく時めかさせ給ひて、かくおほせられける

とか、

いきてのよしにてのちのちのよもはねをかはせるとりとなりなむ

生きて生きている(この)現世でも、死んだ後の世も、二一人は離れることなく、羽を合わせて飛ぶ鳥(「比翼の鳥」)。雌雄おのおの二目一翼で、二羽でありながら合わせて一体となって飛ぶ鳥ときつとなる。

御かへし、女御、あきあきになることのはだにもかはらずはわれもかはせるえだとなりなむ

古今こ今こううかべ給へりときかせ給ひて、みかど、こころに本をかくして、女御にはみせさせ給はで、「やま

と歌は」とあるをはじめにて、まづの句のことはをおほせられつつ、とはせ給ひけるに、いひたがへ給ふこ

と、詞にても歌にてもなかりけり。かかることなむと、父おとどはきき給ひて、御装束して、手洗ひなどし

て、所々に誦経などし、念じいりてぞおはしける。

UNIT

問一 (1)敬語はすべて重要単語。補助動詞は原則として直前に動詞がある。その他のパターンもある。

(2)敬意の対象は尊敬語は動作主、謙譲語は動作の受け手、丁寧語は聞き手。

問二 誰との贈答歌なのか。

問三 歴史物語は鏡物以外にもう一つある。

問四 「あ」に漢字を当てる。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

同二十六日、平氏のいけどりども京へ入る。みな八葉はちえふの車にてぞありける。〔中略〕見る人、都のうちにも限らず、凡遠国およそ・近国、山々・寺々より、老たるも若きも、来りあつまれり。鳥羽の南の門、つくり道・四基までひしとつづいて、いく千万といふかずを知らず。人は顧る事をえず。車は輪をめぐらす事あたはず。治承・養和の飢饉うき、東国・西国のいくさに、人だねほろび失せたりといへども、猶残りはおほかりけりとぞ見えし。都を出でてなか一年、無下にまちかき程なれば、めでたかりし事も忘れず。さしもおそれをののきし人の、けふのありさま、夢、うつつともわかかねたり。心なきあやしのしづのを、しづのめにいたるまで、なみだを流し、袖をしぼらぬはなかりけり。ましてなれちかづける人々の、いかばかりの事をか思ひけん。年来、重恩をかうむり、父祖のときより祇候しこうしたりし輩ともがらの、さすが身の捨てがたさに、おほくは源氏に ついたりしかども、昔のよしみたちまちに忘るべきにもあらねば、さこそはかなしう思ひけめ。されば、袖をかほにおしあてて、目も見あげぬ者もおほかりけり。

大臣殿の御牛飼は、木曾が院参の時、車やりそんじてきられにける次郎丸がおとと三郎丸なり。西国にては、かり男になつたりしが、今一度大臣殿の御車をつかまつらんと思ふ心ざしふかかりければ、鳥羽にて判官に申しけるは、「とねり・牛飼など申す者は、言ふかひなき下臈げらふのはてにて候へば、心あるべきでは候はねども、年ごろ召しつかはれまゐらせて候御心ざしあさからず。しかるべう候はば、御ゆるされをかうぶつて、大臣殿の最後の御車をつかまつり候はばや」とA申しければ、判官「しさいあるまじ、とうとう」とゆるされけり。なめならず悦よろこんで、尋常にしやうぞき、ふところよりやりなはとり出し、つけかへ、涙にくれてゆくさきも見えねども、袖をかほにおしあてて、牛のゆくにまかせつつ、なくなきやつてぞまかりける。

〔注〕○八葉の車…車体の表面に八弁のハスの花形の文様を施した車。 ○大臣殿…内大臣平宗盛。

○かり男…本来牛飼は童姿であるが、一時的に成人の男の姿になったということ。 ○判官…源義経。

問一 傍線部①「人は顧る事をえず。車は輪をめぐらす事あたはず」とあるが、ここではどういうことか。簡潔に説明せよ。

問二 傍線部②「都を出でて」の主語(動作主)は誰か。最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

出典
「平家物語」

鎌倉時代の十三世紀中頃の成立。軍記物語の代表作で、平家一門の没落の過程を、仏教的無常観を基調に描く。琵琶法師と呼ばれる、琵琶で弾き語りしながら各地を回る盲人の僧たちが、語り物として語った(平曲)ことで「平家物語」は大いに流布し、後の文学にも影響を与えた。

重要古語

- ◇めでたかりし事 栄えていたころのこと。
- ◇夢、うつつとも 夢とも現実とも。
- ◇しさいあるまじ、とうとう ざしつかえな
- いだろう、さあさあ。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

【場面A】

はかなく月日も過ぎもて行きて、この隆家中納言は、月ごろ目をいみじう患ひ給ひて、よろづ治し尽させ給ひけれど、なほいと見苦しくて、今はことに御交らひなどもし給はず、あさましくて籠り居給ひぬ。さるは、大殿なども、明暮の御碁・双六がたきにおぼし、憎からぬ様にもてなし聞こえさせ給ふに、いみじく心苦しくいとほしき事におぼされけり。口惜しく、あたらしき事限りなし。

かかる程に、大式、辞書といふ物、公に奉りたりければ、われもわれもと望みののしりけるに、この中納言、「さはれ、これや申してなりなまし」とおぼし立ちて、さるべき人々にいひ合せなどし給へるに、「唐の人はいみじう目をなんつくろひ侍る。さておはしましてつくろはせ給へ」と、さるべき人々も聞こえさせれば、内にも奏せさせ給ひ、中宮にも申させ給ひければ、いと心苦しき事にみかどもおぼされけるに、大殿も、「まことにおぼされば、こと人にあるべき事ならず」とて、なり給ひぬ。十一月の事なれば、さはなり給へれど、今年などはおぼし立つべきにもあらず。いみじうあはれなる事に世人も聞こゆ。

【場面B】

この九月、殿の上宇治殿におはしましたりけるに、それよりいみじき紅葉につけて聞こえさせたまへりし、見れどなほ飽かぬ紅葉の散らぬ間は、この里人になりぬべきかなと聞こえさせ給へりければ、中宮より御返事、ここにだに浅くは見えぬ紅葉の深き山辺を思ひこそやれとこそ聞こえさせたまへりけれ。

【注】

- 隆家中納言＝藤原隆家。平安時代の公卿。
- 大式＝大宰府の官職名。この時は、平親信。大宰府は筑前国（現在の福岡県）にあった。
- 中宮＝藤原道長の娘、妍子。
- みかど＝三条天皇。
- 殿の上＝藤原道長の正室・倫子。中宮の母。
- 宇治殿＝道長の宇治の別荘。宇治は平安貴族たちの別荘地や行楽地として名高い。
- 大殿＝藤原道長。
- 辞書＝辞表。

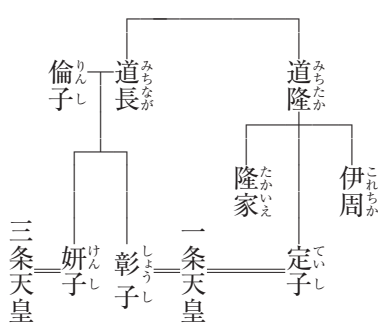
15

10

出典

「栄花物語」の作者は、藤原道長の妻倫子や娘彰子に仕えた赤染衛門とされている。「栄花物語」は同時代を対象とした「大鏡」と比較される。道長の扱いが「栄花物語」の方がより強い賛美の対象となっているのが特徴的である。

人物相関図



重要古語

- ◇いみじく心苦しきいとほしき事におぼされけり＝たいそう心を痛め気の毒なことと思ひになった。
- ◇われもわれもと望みののしりけるに＝人はわれもわれもと大騒ぎして（その職を）望んだが。
- ◇ここにだに浅くは見えぬ＝この都にいてさえも（色が）浅くは見えない。

問一 傍線部①を、人物関係や状況がわかるように言葉を補って現代語訳せよ。

問二 傍線部②を〈例〉を参考に品詞分解し、現代語訳せよ。

〈例〉ありけり ↓ 動詞「あり」の連用形「あり」、過去の助動詞「けり」の終止形「けり」

品詞分解

現代語訳

問三 傍線部③は、どのようなことを言っているのか、具体的に説明せよ。

問四 傍線部 a、b、c は、誰に対する敬意を表すか、文中の語で答えよ。

問五 傍線部④「この里人になりぬべきかな」を主語を補って現代語訳せよ。

問六 「栄花物語」の作者は、【場面A】・【場面B】における登場人物の心情や行動をそれぞれどのように見ているか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 【場面A】では目を思って治療の手段を懸命に講じる隆家に同情を寄せ、【場面B】では中宮とその母との和歌を介した雅びやかな交流を肯定的に見ている。

イ 【場面A】では親しかった隆家を大宰府に追いやった道長を批判し、【場面B】では道長の妻子が風流な遊びの日々を送っていることを冷ややかに見ている。

ウ 【場面A】では隆家を大式の職に就かせようと尽力した道長を褒め称え、【場面B】では中宮とその母がそうした配慮を欠いていることを批判的に見ている。

エ 【場面A】では目を病んで都から離れる隆家のことを気の毒がり、【場面B】では中宮と其の母が紅葉に託して隆家を気遣う和歌を詠んだことを賛嘆して見ている。

UNIT

問一 「聞こえ」は謙讓語、「させ給ふ」は尊敬語。

問二 「なり」+「な」+「まし」と分けられる。

問三 「こと人」は別の人の意味。

問四 aは絶対敬語、bは尊敬語、cは謙讓語。

問五 「里人」とはこの里の人のことであり、また、詠み手はどこで何をしているのかに注意する。

問六 前半の場面については「口惜しく、あたらしき事限りなし」がヒントになる。